【事例１】登園時の親子の観察から始まる保育相談支援の事例

①保育士の観察と変化への気づき

2 歳児クラスの保育士は、ここ数日、不機嫌な様子で登園し、なかなか遊びに気持ちを移すことのできない健太くんと、疲れた表情で登園し、急いで保育所を後にする母親のことが気になっていました。

5 月 15 日（月）、健太くんは泣いた後のような表情で登園しました。保育士は健太くんのことをたずねようとしましたが、母親は急ぎ早に保育室を出ていってしまいました。健太くんはここ数日、粘土でヘビを作りたかったけれど、切れてしまいうまくできず、悔しくて粘土を投げたり、靴を履く際にうまく履くことができずに、靴を投げたりする姿がありました。

②話し合いによる状況の読み取り

保育士たちはここのところ、自分でやりたい気持ちが高まっているけれど、うまくできずに気持ちを体全体で爆発させる健太くんの姿を保育中に何度か観察しており、母親は健太くんへの対応に困惑し、疲れているのかもしれないと推測しました、2 歳児クラスのリーダー保育士（以下、リーダー保育士）は、子どもの午睡中に 2 歳児クラスの保育士 3 名で話し合う機会をもち、体全体で気持ちを強く表現する健太くんへの対応に保護者が困っている状況があるかもしれないこと、保護者への個別支援が必要であり、タイミングを見計らって丁寧に声をかける必要があることを話し合いました。

③支援方法の検討

健太くんのお迎えは 17 時半頃であり、お迎えが多い時間帯であるため保育士が健太くんの母親と丁寧に話をするには保育士の手が足りません。主任保育士に状況を伝え、お迎えの時間にフリー保育士に入ってもらうことで、支援体制を整えました。声の掛け方については、健太くんの今の状況を捉えながら、そのことに保護者と向き合いたいため、午前中に遊びのなかで自分で何度もやり直しながらつくった健太くんの作品について、そのプロセスを説明しながら、「自分でしたい気持ち」と「うまくできない気持ち」の葛藤について、話を展開することにしました。

④支援の実施

降園時、リーダー保育士が「お帰りなさい」と声を掛け、棚の上に飾った健太くんが保育中につくったヘビの作品を見せました。「今日は、こんな長いヘビをつくったんですよ。途中で切れてしまって悔しくなったりもしたのですが、少し落ち着くとまたやり直して。“お手伝いする？”と声を掛けたのですが、“自分でするの！”と。何度もやり直して、こんなに長いヘビができたんです。すごいですよね」と伝えます。母親は「健太、こんなに長いヘビ作ったの？」と健太くんに笑いかけました。そして「最近はなんでも自分でやりたくて。時間があるときはいいんですけど、朝、時間がないときに自分で靴を履くときかなくて困っているんです」と話し出します。保育士は保育所で園庭に出る時も同じ状況があることを伝えます。母親は「やっぱり。朝、時間がかかるので、少し前に声を掛けるようにしているんですけど、結局できなくて私がやってしまうので、靴を投げたり、もう大変で。毎朝困っているんです」と続けます。保育士は「朝は、本当に大変ですよね。お母さん、早めに声を掛けてあげているんですね」と気持ちに共感した後に、早めに声を掛けるという母親の育児行為の良い部分に着目し、承認します。母親は「はい、少しでも早くと思うんですけど。毎朝本当に困っていて。2 分ではダメみたいです。先生、もう 20 分くらい前に声を掛けてみます」と話します。保育士は「そ

れはとても早いですね。保育所でも結構時間をかけながら履いているので、ぜひやってみてください」と声をかけました。保育士は、それだけ長いと履けた後に退屈してしまうのではないだろうかとも思いましたが、母親との援助関係をつくることと、母親の早めに声を掛けるという気持ちを大切にするという自己決定を尊重し、その提案を支持しました。

⑤支援後の評価

健太くんの親子の帰宅後、保育士はクラス内で降園時のやり取りを振り返り、今後も支援を継続していくことを話しました。リーダー保育士は主任保育士に、健太くんの母親との会話とクラス担任同士で話し合った保護者支援の方向性を伝えました。非常勤保育士には翌日伝えることとしました。

⑥支援の継続

5 月 16 日（火）、母親から「20 分はやりすぎでした。下駄箱から靴を抱いて遊んでしまって。明日は 5 分前にしてみます」との話がありました。保育士は「そうだったのですね。5 分前、ちょうどよいかもしれませんね」と母親の自己決定を支持し、見送りました。母親は少し呆れた表情でしたが、健太くんは、うれしそうな表情で登園し、大好きな粘土遊びを始めました。

午睡の時間に、2 歳児クラスの保育士 3 人で昨日降園時、本日登園時の健太くんの親子の様子について話し合い、今後の方針を検討しました。母親が健太くんに配慮しながらかかわっている姿について意識的に支持、承認し、自己決定を尊重しながら、必要に応じて靴の履き方について、健太くんの現状を伝え、行為に誘導したり、気持ちを切り替える方法を提案すること、情報交換をしながらよりよい方法を一緒に探っていくことを話し合いました。

翌日はうまくいったとのことでしたが、5 月 18 日（木）、「今日はどうもうまく履けなくて。怒って靴を投げてしまい、怒っている所を私が履かせてきたのでこの通り」と母親。健太くんは目の周りを真っ赤にして登園しました。保育士は、「どうもうまく履けなくて」という母親の疑問に対し、「園ではマジックの下の部分が中に入ってうまくいかないことが多く、マジックのところを大きく開けておくとスムーズに履けることが何度かありました」と、保育所での健太くんの姿について具体的に困っている部分を伝達し、方法を提案しました。

5 月 19 日（金）、「先生、今日は自分でうまく履けたようで、健太、ご機嫌です」と話します。保育士は「お母さん、朝の忙しい時間なのに丁寧に向き合って下さりありがとうございます」と母親の育児行為を承認、支持する声を掛けました。

その後、踵を踏みながら歩き出してしまうとの相談があり、踵の話の部分を手前側に倒しておくと、健太くんが履くときになかに巻き込みにくく引っ張りやすいこと、それでも難しそうなときは、一緒に引っ張っていることを伝え、保育所での健太くんの姿を伝達、解説しながら方法を提案しました。

⑦事後評価と終結

次第に靴を一人でうまく履けるようになってきた健太くん。靴を履くという行為の獲得のプロセスに丁寧に対応していくことで、母親は自己主張が強くなる時期の健太くんに対して少しずつ落ち着いて対応できるようになり、健太くんも母親も笑顔で登園するようになりました。支援開始から 1 ヶ月後、保育士は健太くん親子について話し合い、登降園の姿から、現在は個別支援の必要がなくなったことを確認しました。

⑧事後評価と終結

他の保護者からも朝の登園、そして夜の寝かしつけがうまくいかないことについて相談があり、次の保護者会は「朝の準備と夜の寝かしつけについて工夫していること」を保護者の方々にそれぞれ話してもらい、家庭での情報を交換してもらうことにしました。また、家族内でも話し合ってもらえるように、あらかじめ話し合いの内容を保護者に伝えました。家庭内での話し合いについては、負担にならないようにさりげない言葉で添えました。